

「国際和解」をテーマにした映画制作にあたって

クリエイターの皆様

ERIFF国際和解映画祭実行委員会

はじめに

この度、「第4回国際和解映画祭 (ERIFF: East Asia Reconciliation International Film Festival)」の開催に伴い、「国際和解」をテーマとした映画作品を公募しています。本映画祭は、東アジアにおいて映画制作者や脚本家として活躍されている方、そして映像クリエイターや脚本家を目指している方たちを対象に、「国際和解」とは何かを追求し、国籍や国境を超える何らかの新しい視点からその可能性を広げる場となると期待されています。

現在の世界の文脈において「国際和解」は非常に重要な価値があります。ERIFFは、その概念を整理し掘り下げることで、映画というストーリーの中に、複数国家の国民にまたがりながら、さらに、国家や国籍を超えた異なる文化や信念が共存する、地域レベルにおいての社会への理解と共感が重要であると考えます。本資料では、「和解学」に依拠しながら「国際和解」というコンセプトに焦点を当て、我々、国際和解映画祭実行委員会において議論されている「和解」の概念とその捉え方について、映画制作者の皆様に向けて、映画制作の際のヒントを提供させていただければ幸いです。

和解学が求める和解の要素

互いが変化し歩み寄る和解

和解学とは近年発展している新学問領域で、その要素は未だ確実には定まっていません。しかし、そこにはある程度の重要な要素として一部コンセンサスの取れているものがあり、下記ではそれらを紹介します。

和解学的な観点から見た、国民的和解と市民的和解をベースとする国際和解とは、物語の中で登場人物たちが過去の対立を乗り越え、お互いを理解し合う努力の上に、様々な感情的対立と葛藤を克服するプロセスそのものです。この克服のプロセスは、主人公やそれに敵対する存在を含めた、互いの成長と変化による新しい関係の芽生えと捉えることもできるでしょう。一人一人が自分らしく、独自に成長する過程において、自分を支えてくれたものに目を向けることで、高次元で互いの理解と尊敬の念を芽生えさせることができます。このように、自己のアイデンティティと矛盾することなく、新たな関係を生み出すことが、国際和解にとって必要不可欠です。

国際和解では、個人が持つ「互い」や「自己」という集合的意識そのものを根底から支えている、集団において共有されてきた過去の恨みや怒り、誇りや満足という感情を生み出している集合的記憶を自覚させます。それと同時に、異なる集合的記憶の間に何らかの理解を生み出し、新しい理解が互いの集団の中で主流となっていくような、新しい文化の創造が期待されます。従来、新しい理解が生まれても、それは集団内で重要視されず、国民文化を変えるまでには至りませんでした。また、政府間の政治的妥協や手打ちによる、国益やパワーの論理に根ざす解決アプローチから文化の変容が生まれなかったことは、これまで繰り返されてきた国民感情の対立から見るすることができます。

国籍が違う前提での和解

和解学的な見地から期待される国際和解は、単なるグローバルな市民交流そのものとは異なります。市民交流によって生まれる市民的和解を前提としながらも、互いが異なる国民的背景を背負っていると言う現実から目を背けることなく、国民という巨大な想像の集団を支え、維持している文化や教育のあり方を見直し、各種の制度の上に築かれている安全や豊かさを支える国民的・国家的関係を、より健全な競争や協力を可能とする方向に向けていこうとするものが、国際和解の基本コンセプトです。これはあくまでも、異なる国籍を背負っているという前提を直視しており、それぞれの国民的アイデンティティを保ち成長させることで、高い次元で築かれる、より包括的な和解です。またこのような和解が各国の中で排斥されず、むしろ新しい主流となっていくでしょう。

対立する双方の国民的アイデンティティの根底には、国民に共有される集合的記憶、いわゆる歴史認識と国民感情が融合したものが存在しています。こうした複合体の対立する状況にあって、国民的アイデンティティと矛盾することなく、高い次元へと互いを成長させることで、新しい関係を生み出すことが期待されているということができるといえるでしょう。その創造のプロセスには、「歴史的に全く知られていなかった事実の発掘」や、過去の“歴史”とは違う「思いもよらない再解釈」が、創造（和解・成長）のヒントとなり得ることでしょう。

問題の重層性

同じ国民的アイデンティティを持った人（例：同じ国籍）でも様々な意向を持った人たちが存在します。また、一人の人間の心の中にも違う意向が存在し、自分自身の中でも葛藤を繰り返しているというのが実情です。しかし、選挙という公の行事や、様々な東アジアの国民的慰霊・儀式空間においては、国民という社会に共有されている最大公約数的な「公共の記憶」と、それに根ざす国民的感情、さらにはそうした感情に根ざす「正しい」政治のあり方が問われます。つまり公共の記憶は、個別具体的な記憶が儀式や儀礼に際して集合的な記憶として結晶化したものということができるといえるでしょう。それを具体的な形にしたものが、芸術であり、映画であると考えています。しかし、国民内のみの公定記憶を競争させ、押し付けることは、映画祭の趣旨とは全く異なります。

複数の正義

集合的記憶の背後には、その記憶を選び出す指針となる普遍的な価値が存在していると考えられます。普遍的な価値といっても、大きく分類すれば、「社会秩序・平和・豊かさ」など、社会全体に共有される一方で、「個人の尊厳・自由・平等」など、社会を構成する一人の人間に関わる価値があります。

これらの価値のどちらか一方が強調される文脈において、排除された側の人々は、その排除された価値を「正義」として掲げるため、社会的な紛争が巻き起こされるきっかけが生まれます。その「正義」が受容されれば、新しい価値の下、社会が高い次元で統合され直すのです。私たち人間は、この歩みを歴史上、古来から繰り返してきました。しかし、今の時代において、地域という国民を超えた次元へと高めることができるのかどうか問われているのではないのでしょうか。

実際は、豊かさ無くして人間の尊厳はなく、人間の尊厳無くして豊かさはありません。また自由なき平和は独裁にすぎず、平和なき自由も互いの永遠の闘争を生み出すに過ぎません。

必ず達成されるものではない「和解」

これまでの文脈から見れば、和解という概念は永遠の対話のプロセスということができません。それは民主主義という制度を「理想」として定義することであり、永遠に達成できないと

しても「理想」として可能な限り追求するということです。和解とは必ずしもストーリーの中で達成されることで終わる問題ではありません。むしろそのストーリーは、その後に思考をめぐらせる余地を残して終わらざるを得ないものかもしれません。永遠の対話を粘り強く望んでいこうとする意思を示し、国際和解という概念を映画の一本のストーリーに組み込んだ作品をお待ちしています。

おわりに

映画作成に向けて

今回の映像作品についてストーリーの対象地域は東アジアに限定はしません。また、ストーリーの中で、必ずしも「達成」されて終わってしまう和解である必要もありません。

ERIFF国際和解映画祭実行委員の想い

映画は、時代の変遷や社会課題、個々の物語が交錯するなかで、観客に深い感動や洞察をもたらしてきました。当映画祭では、「国際和解」をテーマに掲げ、「和解」という永遠の理想へと向けて「人々」に架け橋を提供する作品を期待しています。皆様の映像作品の中で新たな視点をもった国際和解の重要性や可能性を探求し、映画の歴史の一編を紡いでいただけることを我々は願っています。

映画は、時に社会を反映し、時に社会を変える力を持っています。歴史と向き合いながら、国際和解に対するあなたの独自のアプローチやメッセージを、ご自分の脚本と映像を通じて表現していただければ幸いです。それが、若者を中心に次の世代へと繋がれていく価値あるメッセージとなることでしょう。

ご自身の経験や考え、そして映画制作に込めたメッセージを通じて、和解の旅路を描く素晴らしい作品のご応募を、心よりお待ちしております。